

シニア会員活性化へ向けた九州支部での取り組み

An Attempt to Activate Senior Members in the Kyusyu Branch of JGS

木寺 佐和記 (きでら さわき)

西日本技術開発株式会社 監査役

1. はじめに

シニア層活躍への期待は、周知のとおり会員の減少、高年齢化という現実的な問題からきてはいるが、社会全体からの要請でもある。また、退職後も社会へ貢献して行きたいという、個々の会員の強い思いが在ることもしばしば耳にするところである。

このような課題・期待に対して、効果的かつ持続できる行動を起こすためには、当事者＝シニア会員が「どのような認識を持っているか」「行動が可能か」ということについて胸襟を開いて語り合い、実現可能な策をとりまとめることが肝要と考え、九州支部において、グループ討議方式による「シニア会員交流会」を開催した。本報告は、この会の結果とその後を紹介するものである。

ここでのシニアとは、「第一線を離れたもしくは近々離れようとしている60歳頃以上の方々」をイメージしている。

なお、シニア会員活性化の問題は、高齢者の社会参加・貢献の在り方という大きなテーマと切り離しては考えられないため、交流会結果の紹介に先立ち、高齢者の捉えられ方の変遷についてもごく簡単に触れた。

2. 高齢者の捉えられ方の変遷・現状

高齢者の捉えられ方は、国によって、時代によって、また経済情勢などによっても変化し、肯定・否定の両面がある。エイジング (aging) とは、人が高齢期に向かうことを言い表す言葉であるが、このエイジングについては、ほぼ以下のような考え方で推移してきたとされる¹⁾。

- ① 離脱理論 (disengagement theory)
- ② 活動理論 (activity theory)
- ③ 継続性理論 (continuity theory)
- ④ サクセスフル・エイジング (successful ageing)
- ⑤ プロダクティブ・エイジング (productive ageing)
- ⑥ アクティブ・エイジング (active ageing)

エイジング理論は時代と共に変遷し、高齢者像は社会的離脱者という「否定的な」捉えられ方から、社会的に「適応」していくものであるという理論を経て、プロ

ダクティブ・エイジングによって「肯定的・生産的」高齢者像へと転換が図られ、現在はさらに、アクティブ・エイジングによって「社会の貢献者」としての新たな高齢者像が打ち出されている¹⁾。

3. シニア会員交流会の進め方と結果

今回の交流会での結論は、実現可能、持続可能であることが求められるため、活動を担うシニア会員相互の意見交換と合意形成が必須と考えた。

活発な意見交換と合意形成を円滑に行うためには、筆者の経験上、ワークショップ方式が最も有効と思われた。経験豊富なメンバーでの意見交換であったため、「テーマ：シニア会員参加機会の拡大」について、最初から「やりたいこと」「やれそうなこと」「やるべきこと等」についての意見を出し合った。その結果より「具体的な行動目標」についての合意形成を経て、最後に、「行動目標の実現を阻害する要因」について意見交換した。

意見交換結果は、図—1に示すとおりである。様々な意見が出たが、「シニアによる経験談の開催」が具体的な行動目標として合意された。

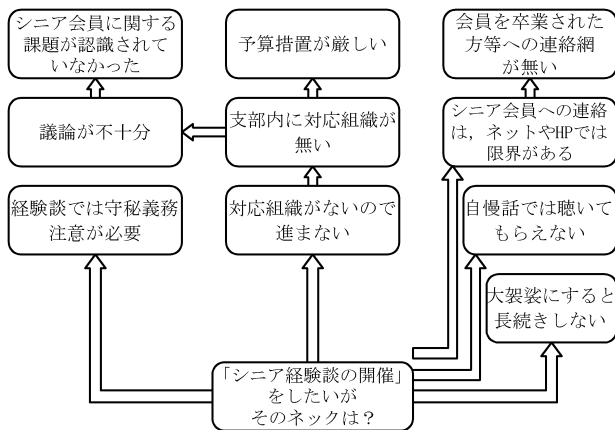
シニアの強みは経験があること	貴重な経験を伝えたい	ものの考え方、捉え方を伝えたい
失敗をしないと学べないものを伝えたい	ここだけの話をしたい	一皮むけた経験を伝えたい
失敗例を語るべき	技術的自叙伝を伝えたい	今だから言えることを伝えたい
若い人とうまく付き合いたい	若い人に人脈のつくり方を伝えたい	熱い思いを伝えたい
支部活動に貢献された先輩の話聴きたい	裁判になったような事例を伝えて行きたい	ネットでは「どうやって(プロセス)の部分」は分からない
経験談を支部でデータベース化すれば良い	気軽に参加できる会が良い	シニアの問題は、高齢者(老年)の生き方全般に関係する



様々な貴重なアイデア等の表明を経て
行動目標「シニア経験談の開催」で合意

図—1 「シニア会員参加機会拡大」討議結果

次に、「シニア経験談の開催」へ向けての阻害要因を整理した結果を図—2に示す。



図—2 「シニア経験談開催」に関する阻害要因

交流会での結論を整理すれば、以下のとおりである。

- ① シニア会員が経験を伝え合う場を学会主催で持つ
- ② まず、シニア会員が話せるネタを出し合う
- ③ 気軽な会としてスタートした方が良い
- ④ コンセプトは「一皮むけた経験²⁾」「ここだけの話」「今だから話せる」「失敗例の披露と学んだこと」
- ⑤ 学会を卒業された方々にも呼び掛ける
- ⑥ 若手・中堅にも参加を呼び掛ける
- ⑦ これらをデータベース化していく

4. 結論を踏まえての活動計画

上記の会終了後、会の結論に基づいて、参加メンバーそれぞれが考える「経験談」の概要を提供して頂いた。経験談の内容は、前記の結論のとおり、「一皮むけた経験」「ここだけの話」「今だから話せる」「失敗事例」というコンセプトに合致するものとした。その結果、現段階では、6名より、合計25テーマが寄せられている。例えば、「夜が明けたら無くなっていた堤防盛土」「N値を過信した失敗事例」「シルト軟弱地盤で三軸CD試験をして上司に叱られた」「鉄塔大ピンチ！」「一皮むけた「地震応答解析ソフトの開発と活用」」等々である。

今後は、これらの情報の中より、1～3名の経験談提供と近況等も含めての情報交換を行う「シニア経験談の会」を、最低年1回開催できるように、九州支部執行部や今回の交流会参加者らと協働で取り組んで行く予定である。

5. おわりに

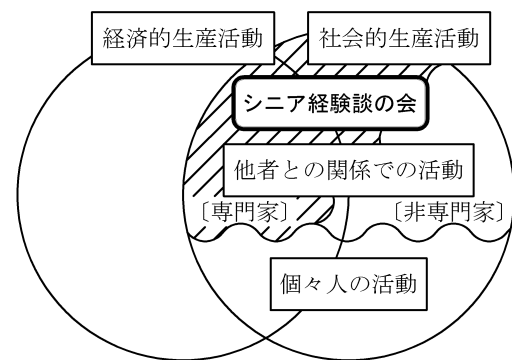
「シニア経験談の会」の意味合いを筆者なりに整理すれば次のとおりである。高齢者の生きがいの中核には、「人の役に立つこと」が存在するという指摘¹⁾は意義深い。この会の目標もそこにある。ただし、「経済的生産活動」というより「社会的生産活動³⁾」の意味合いが強い。また、個々の活動では不可能な「他者との関係性構築と

いう活動⁴⁾」であり、人と人との交流・協働による暖かさを感じられる活動を目指す。さらに地盤工学という「専門性を背景に持つ活動」であり、技術継承という意味合いも持つ。これらを整理したものが図—3である。

シニア会員は、たとえ経済的生産活動の第一線からは退いたとしても、もう一つの重要な生産活動である社会的生産活動の中心的な担い手として、社会的にも、個人の思いとしても期待は大きいと考える。ささやかな試みかも知れないが、ぜひ継続的実現を目指して行きたいと考える。

最後に、交流会参加者各位と支部執行部へ感謝を申し上げるとともに今後の協力をお願い申し上げます。

目標：人の役に立ちたい (=生きがい)



図—3 「シニア経験談の会」の意味合い

参考文献

- 1) 永野ひとみ：高齢者の社会貢献と生きがい活動に関わる考察—山口県の高齢者施策と「公民館」を手がかりにして—, Journal of East Asian Studies, No11, pp. 91～116, 2013.
- 2) 石原直子：女性役員の「一皮むける経験」—幹部候補女性を育てる企業のための一考察—, リクルートワークス研究所, Works Review Vol.1, PP. 22～35, 2006.
- 3) 片桐資津子：福祉社会学における「生産性」概念, 鹿児島大学経済学会「経済学論文集」第53号, pp121～133, 2000.
- 4) 渡邊大輔：退職後の日常と当事者のニーズ～藤沢市竹炭くらぶを事例として～, 総合政策学ワーキングペーパーシリーズ No. 111, 2007.

(原稿受理 2015. 3. 12)